

中國出土資料學會
平成30年度第2回大会

日 時：平成30年12月8日（土）

平成30年度第2回大会

受付開始 12:30～

研究報告 13:00～17:00

総会 17:00～18:00

場 所： 東京大学 法文1号館215教室（東京都文京区本郷7-3-1）

会場へのアクセス：■地下鉄丸ノ内線・大江戸線・・・本郷三丁目駅下車徒歩8分

■地下鉄南北線・・・東大前駅徒歩3分

■地下鉄千代田線・・・根津駅徒歩10分

報告Ⅰ 網代 菜摘（昭和女子大学附属昭和高等学校非常勤講師）

発表題目：里耶秦簡における字形の特徴について—秦系文字・楚系文字の比較を通して—

発表概要：本報告では書道史の立場から、秦系文字と楚系文字の比較を通して、里耶秦簡の字形の特徴について述べる。戦国秦、戦国楚では、文字の書きぶりが異なることが出土した作例から確認されている。後の統一秦の文字統一では、戦国期の六国で書かれていた文字は排除され、戦国秦で書かれていた文字で統一した、という先行研究が見られる。したがって、統一秦では楚系文字は排除されたこととなる。しかし、先行研究では、楚系文字の影響の見られる秦系文字が書かれた秦簡があると述べられている。その点に疑問を持ち、里耶秦簡を含む秦簡と楚簡の「之」字を取り上げ、分析・比較を行なった。分析の結果、秦系文字にも曲線や右上がりの横画など楚系文字の特徴をそなえるものが見られた。しかし、楚系文字と比較するとその程度は微々たるものである。本研究では里耶秦簡を主たる作例とし、秦系文字・楚系文字の影響関係について報告者の考えを述べる。

報告Ⅱ 史 傑鵬（東京大学東洋文化研究所訪問研究員）

発表題目：利用詞源分析破解《楚辭》和《史記》中的兩個疑難問題

発表概要：《楚辭·招魂》中の“獻歲發春”，和《史記·楚元王世家》中の“羹頡侯”，歷代有注，現在學者也有很多討論。但細玩文義，我們認為目前所有解釋都有問題，放進原文中，都有捍格不通之處，因此必須尋求新的解釋。通過基於上古音基礎上的詞源義分析，我們提出了兩個新看法，並藉此指出，在考釋先秦、秦漢以及同時代出土文獻疑難詞彙時，對詞彙的詞源義分析，能發揮很重要的作用，甚至成為解決問題的關鍵。

報告Ⅲ 黄 人二（華東師範大学中文系教授）

発表題目：秦漢簡牘奏讞書研究—以張家山漢簡的案例3、17為例

発表概要：《奏讞書》是張家山第二四七號漢墓所出竹簡之一，共有二十二個案例，其中第十七例與司法審判有關，對於其時之歷史律令，可以深入探釋。文字內容是寫秦二世元年十月，毛見講，與之謀盜牛而講被誣陷之事。在不到三個月時間內，講上訴。最後，在廷尉主持審判下，講因為於元年十月不盡八日，曾為走馬都魁庸於咸陽，十一月一日踐更，所以講是不可能盜牛的，廷尉判決講無罪，並要求縣級官吏對講做出補償決議，身份得到解放，成了隱官工匠。其中，又可於秦漢司法審理層級及公文之轉送，有一清楚的瞭解。類似此種案例，可以為以後司法審判判案之依據，稱為「廷行事」、「故事」。

☆参加費（資料代）500円
☆非会員の来聴を歓迎します

連絡先（大会委員長）

〒270-8555 千葉県松戸市新松戸3-2-1 流通経済大学法学部 富田 美智江

Tel : 0297-60-1930（直通） E-mail : tomita-michie@rku.ac.jp

